



| | |
|--------------|---|
| Title | <精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み 「べてるの家」訪問研修報告> 「老い」と向き合う : 『浦河べてるの家』訪問記(2014年 9月10・11日) |
| Author(s) | 永浜, 明子 |
| Citation | 臨床哲学. 2015, 16, p. 173-177 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/51595 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「老い」と向き合う

——『浦河べてるの家』訪問記（2014年9月10・11日）——

永浜 明子

はじめに

北海道浦河町にある社会福祉法人「浦河べてるの家」を訪問するにあたり、私の第一の関心は、経営、すなわち収支がどのような形でなされ法人が成り立っているかということであった。これまで、多くのNPO法人の閉鎖や統廃合を見てきた私にとって、「どんぐりの会」から数えるとすでに30年以上続く組織が今もなお成長を続けている戦略を知りたいと思ったからである。もう一つの理由としては、私たちの税金の一部が使われる組織とそこを利用する人たちのあり様を自分の目で見たいと思ったからである。

結論から言うと、この願いは叶わなかった。その大きな理由は訪問者の多さである。「べてるの家」には連日ひっきりなしに全国各地あるいは海外から見学者が訪れる。一日の作業や施設のような目に見え実体験したことに関する質問についての質疑応答を行う時間はあったが、経営自体に関する質問に答えていただける方との時間は残念ながら持つことができなかった。もちろん、法人として出している収支報告書から分かることも多い。しかし、私の関心はもっと詳細な金銭の流れであった。例えば、障がい者年金受給者あるいは生活保護受給者の割合、その一人ひとりから法人へ支払われる家賃や食費・光熱費などを含む費用、第三者の金銭管理を必要とする利用者の金銭を誰がどのように管理をしているのか、正規職員以外の職員の人数とその勤務形態および賃金システムなど細かい金銭の流れなどである。これらのことについては、改めてお聞きできる機会があればと思っている。

訪問してすぐに感じたことは、若い利用者の少なさである。中年あるいは高齢の方の姿が目についた。そこで、高齢化に視点を移した「べてるの家」の訪問について報告したい。

高齢化の課題

作業施設や居住施設を見学する中、若い年齢層の姿はほとんど見当たらない。多くの利

利用者の方が30歳後半以降という感じであろうか。1日目の見学も終わろうとしている午後、60歳を過ぎていると思われる一人の男性がふらっと作業施設に入ってきた。どこか足元がおぼつかない。最初は、「薬の副作用かしら？」と思ったが、どうもそうではなさそうである。身体的な機能低下から生じるふらつきのもようであった。

ミーティング時のスタッフのお話では、「べてるの家」には訪問時、設立時期からの利用者を含め70歳以上の方が3名、60歳代の方が複数いるということであった。現在、「べてるの家」は新しい利用者の受け入れはしていない。現状のスタッフの数と施設でサポートできる利用者数は上限に達している。それは、利用者の入れ替わりが少なく、長期に利用している人が多いという表れでもあり、同時に、今後ますます「べてるの家」における高齢化が進んでいくということの意味する。精神疾患が主訴である利用者の高齢化に伴う新しい課題が出てくることは明かである。足腰、その他身体機能の衰え、認知の衰えなど、誰しもがいずれ直面する課題ではあるが、幻聴さんや様々な苦勞と共に生きる人、それをサポートするスタッフにとってはより大きな課題となるのではないだろうか。そして、「べてるの家」の活動する地域もまた新たな局面を迎えるであろう。

高齢化への取り組み

高齢化が間近な問題として表れ始めている「べてるの家」では、この問題についてすでにスタッフミーティングで取り上げられることが増えているという。スタッフが感じている具体的な課題としては、足腰の衰えと以前のような元気がなくなってきている利用者への対応であった。現在は、支援を手厚くする、よりきめ細やかに注意するなど出来る限りの対応をしている。また、「なんちゃってヘルパー（パーソナル・アシストとも）」と呼ばれる、正規のヘルパー資格を持たない利用者が、ヘルパーのちょっと手の届かない部分、もう少し応援の必要な部分の支援を行っている。

このような支援のあり方や利用者の動きは、「べてるの家」で特徴的だと感じたことの一つである。日に何度も実施されるミーティングを司会する人、作業の指揮をとる人、訪問ケアに行くと言って作業施設から出かける人のうち、誰が利用者で誰がスタッフなのかよく分からない光景であった。施設で時間を過ごすにつれ、それらの中の数名の方についてはスタッフであることが分かってきたが、訪問最後まで分からずじまいだった人が何人もいる。スタッフと利用者の空気が割れていない、今も思い出すことのできる、その場全

体に割れることのない空気が漂っているなんとも不思議な空間がそこにはあった。

高齢化に対する「べてるの家」の今後の取り組みとして、「ヘルパーの資格取得」「ヘルパーステーションの設立」「ケアホーム・高齢者ホームの設立」の3つがあるというお話であった。

ヘルパーの資格を取得するのは利用者である。ヘルパーの資格を持たない「なんちゃってヘルパー」の利用者が「ヘルパー」になり、主たる支援を行う立場になる。そしてまた他の「なんちゃってヘルパー」がこの人たちを応援するという輪の広がりである。この計画を聞いた瞬間、いつの日か、ほとんどの利用者が「なんちゃってヘルパー」あるいは「ヘルパー」となり、お互いがお互いを応援し支援する光景を想像し、笑みがこぼれた。「ヘルパーステーション設立」も、そのステーションには利用者本人が多く属するということになるのかもしれない。あの不思議な空気がさらに不思議な空気になると思うとまた微笑ましい。

3つ目の構想である「ケアホーム・高齢者ホームの設立」は、時代の先をいく取り組みになると感じている。昨今の問題として、認知の低下がかなり進んだ人や精神疾患のある人のサポートが地域の特別養護老人ホームあるいはグループホームでは困難であり、精神病棟のある病院での入院生活を余儀なくされるケースが少なからず存在する。そのような中、「べてるの家」が設立するケアホーム・高齢者ホームは、もともと精神疾患の人の高齢化に対応することを目的としているため、施設から追いやられそこにたどり着くあり方とは意を大きく異にする。少ないスタッフと予算の中、認知の低下がかなり進んだ人や精神疾患のある人を特別養護老人ホームやグループホームがサポートできないことは容易に想像でき、決してそれ自体を否定や批判するわけではないが、精神疾患の人のための法人がその人たちの高齢化に対応するための施設は、先駆的役割を果たすであろうと期待している。

看取り

高齢化に伴う私の疑問は、利用者とその家族の問題、もっと具体的に言えば、「べてるの家」のスタッフが成年後見人になるのか、利用者の最期を誰が看取るのかということであった。

認知の低下や高齢になるにつれ、日常生活で必要な様々なことの管理が難しくなる。特に重要となり、問題が起りやすい事柄は金銭に関する管理である。家族（ここでは、親

と子どもの関係に限定する)がない場合には、成年後見人制度を使い、親類あるいは事業所が後見人となり、本人に代わって様々な管理をすることが容易である。しかし、家族がいる場合、家族以外の者が後見人となることは制度上問題がなくても実質的な家族の心情からは難しいと考えられる。「べてるの家」の利用者の中には家族関係が円滑でない人も少なからず存在しているようである。もちろん、すでに成人している利用者であり、本人が判断・決定する権利を有している。これは、私が今まで関わりを持ってきた知的あるいは身体障がいの人たちが利用する施設とは大きく異なる部分である。親や兄弟姉妹がない場合を除いては、ほとんどの利用者本人と施設は、利用者の家族と一定の関わりを持っている。その関わりの中で、利用者の親が自身の死後を案じ後見人制度の利用について施設と検討することが多い。家族と円滑な関係がない利用者の財産管理を事業者が行うことはたやすいことではないように思われる。

また、誰がその人の最期を看取るかという問題も今後の課題となる。医療の発達に伴い寿命はさらに延び続けることが予想されるが、健康寿命はそれに追いついていない。一方で、病院ではなく在宅での医療がますます推進されていく中、「べてるの家」の利用者の「宅」はグループホームあるいは構想にあるケアホーム・高齢者ホームとなるのだろうか。在宅での介護、医療に悲鳴をあげる家族が増える現状において、「べてるの家」を利用する人たちの最期がどのような形であるのか私には想像が難しかった。それぞれ個別の事情があり、最期の時を家族と共に過ごすということのみが最善だとは決して思わないが、やはり私には頭の中でしか想像できないことである。ここ数年、最期の時をどう迎えるか、最期の前をどう生きるか、繰り返し繰り返し両親の意向を確認してきた。生活を共にはしていないが、身近にいたからこそ両親の生き方や最後の迎え方を感じることができた。そのような関係であり時間を持ったが故にその意向に沿った行為ができた実感している私にとって、本人の意向に沿う最期の看取りは簡単なものではないと思っている。家族がない場合は別として、保守的であるかもしれないが、家族と看取りを切り離すことは難しい。後見人や看取りに関することは「べてるの家」における今後の検討課題として挙げられているということであったので、またの機会に尋ねてみたいと思う。なお、「べてるの家」の利用者と家族については、杉本氏が報告している。

さいごに

今回の訪問は、多くのことを考える機会となった。密着した関係ではないが、私にとって家族というものに対するつながりや安心感を改めて認識した。「家族」と特別認識することもなく、空気のように存在し、支え合う姿が当然であった。今もこれからもそれは変わらない。今回の訪問で、「べてるの家」の利用者の高齢化に対する関心は、後見人や看取りに直結し、最期の瞬間の前をどう生き、最期をどう迎えるかということと家族を切り離すことができない私自身を発見した。家族が看取ることが最善とは思っていないが、私にとっては、いい意味の発見であった。また、知的あるいは身体的に障がいのある人たちや発達障がいのある人たちの高齢化について改めて考える必要のある課題も多く見いだせた。さらに、普段はとんぼ返りで授業にしか出席できず、ほとんど交流できない臨床哲学の浜渦・稲原両先生を始めとするメンバーと楽しい時間を過ごせたことも大きな収穫であった。

「べてるの家」の皆様、この機会を与えてくださった浜渦辰二教授に感謝申し上げます。